

慶應義塾中国文学会 第十一回大会

開催日：2026年7月11日（土）13:00 開始（対面開催）

会場：慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 1F シンポジウムスペース

開場

12:30

大会司会者：松倉梨恵（慶應義塾大学文学部 助教）

開会挨拶

13:00 - 13:05

吉永壮介（慶應義塾中国文学会 会長）

研究発表

①13:05 - 13:35 張智超（慶應義塾大学大学院文学研究科 博士課程）

発表題目：「川劇三国戯「連環計」に関する研究」

発表要旨：川劇三国戯「連環計」は講史話本や白話小説、並びに前代の三国戯など、様々なジャンルからの影響を受け、そして巴蜀地方の文化、風土を反映しようとする改編も加わって成立した劇目である。それは独特なストーリー・関目や人物像を有し、重層的な三国志受容の様相を呈している。本研究は現存する劇本を中心とした資料収集、文献調査および「連環計」の演出の観察・記録を中心とした現地調査を実施した。それを踏まえ、「連環計」の劇本の内容、特徴、劇本間の相互関係を調査、分析した。その上で、伝統的な改編から現代的な改編へという通時的な視点に立ち、比較研究の手法を用いて、川劇「連環計」のストーリー・関目や人物像の変容について考察を行い、川劇三国戯を視点における「史実と虚構の揺らぎ」を反映した改編、そして、観衆の嗜好や社会と時代の要請などを反映した三国志受容の一端を明らかにしようとするものである。

司会者：山下一夫（慶應義塾大学理工学部 教授）

②13:40 - 14:10 脇山豪（東京大学大学院人文社会系研究科 後期博士課程）

発表題目：「全真教の遺漏文献——U B C本『群仙要語纂集』を中心に」

発表要旨：本発表は、『道蔵』所収の董漢醇編『群仙要語纂集』について、従来知られていなかった二種の明刊本、すなわちカナダ・ブリティッシュコロンビア大学（UBC）蔵本および『新刊道書全集』本を取り上げ、その特徴を報告する新出資料紹介を基礎とし、あわせて同書の思想史上の意義についても検討する。従来、道蔵本『纂集』は既存文献の節録集にすぎないと見なされ、ほとんど注目されてこなかった。しかしUBC本には、道蔵未収で従来知られていなかった初期全真教関係文献が多数収められており、初期全真教思想を考察する上で重要な手がかりを提供する。また既知文献の節録部分についても、比較的古い本文形態を保持していることがうかがえ、通行版本との対照によって、全真教文献の編纂過程、とりわけ仏教的表現の削除などの編集方針を具体的に検討することが可能となる。さらにUBC本には董漢醇の自序が付されており、『纂集』の成立事情や全真教文献の教外受容についても重要な示唆を与える。加えて、従来全真教研究で利用されてきた語録集『真仙直指語録』が本書を基礎として成立した可能性、さらに明の憲宗『全真群仙集』や清代龍門派の『邱祖全集』など後代文献への影響についても論じる。

司会者：酒井規史（慶應義塾大学商学部 教授）

③14:15 - 14:45 石川就彦（慶應義塾大学文学部 非常勤講師）

発表題目：「感情表現から見る文簡本『水滸伝』と金聖歎本」

発表要旨：数多く現存する『水滸伝』の版本は、物語を詳細に語る文繁本と、簡略化して語る文簡本とに大別される。文繁本は百回本から百二十回本、七十回本と変遷しており、これまでの『水滸伝』研究の中心であった。一方で文簡本も近年注目を浴びつつあり、版本系統の解明が次第に進んできた。発表者はこれまで金聖歎本を中心として、文繁本『水滸伝』の感情表現と人物像の関係について数篇の論考を出し、キャラクター造形において感情表現が大いに活用されたことを論じた。一方、文簡本の感情表現について「『水滸伝』文簡本の泣き描写」（『藝文研究』第118号、2020年6月）で論じたが、これは泣き描写のみを対象とした調査であった。本発表の前半では、これまでの調査を踏まえて文繁本の感情表現（泣き・笑い・怒り）の特徴を整理した上で、文簡本の感情表現の傾向・特徴の有無について検討する。本発表の後半では、文繁本・文簡本間の感情表現に対する改変状況の比較から浮上した、金聖歎本の編纂過程において文簡本が参照された可能性について論じる。本発表では、従来あまり詳細には論じられなかった文簡本の表現面に言及しつつ、文簡本が金聖歎本の編纂に影響を与えたという新視点の提示を試みる。

司会者：佐高春音（大阪大学大学院人文学研究科 准教授）

④14:50 - 15:20 中原逸郎（楓錦会）

発表題目：「京都と明清楽—十念寺文書を中心に—」

発表要旨：本発表は、南画家の西川蓼邨が明治14年（1881）に描いたと思われる扁額を中心に、明治期における京都の明清楽の実態を把握することを目標とする。西川は『古今名家南画人名一覽大成』（西川、1880）を著した南画家で、伊藤百助によると京都の画家で福井に遊学し、月琴を好み、同地に月琴愛好家を増やす等、多大な文芸的影響を与えたという（伊藤、1930）。発表者は知人が出展する華道の会で訪問した十念寺（京都市上京区）で、偶然月琴の描かれた扁額を見つけ、その漢詩画の解説に着手した。月琴は幕末の長崎から全国に伝播し、明清楽と呼ばれる中国音楽の中心をなす楽器とされ、幕末には風紀を乱す、との理由から禁じられた三味線演奏の復活にも寄与したとされる。月琴を含む明清楽に関する論文は多いが、大名や公家に関する愛好の記録が多い一方、市民による愛好の記録が少なく、そのため本発表では既述した扁額を「十念寺文書」と呼び、その南画詩の解説試訳を元に、明治時代中ごろの京都市民の嗜好の一端を記したい。

司会者：須山哲治（慶應義塾大学文学部 准教授）

休憩

15:20 - 15:35

講演

①15:35 - 16:25 杉野元子（慶應義塾大学大学院文学研究科 教授）

演題：「もう一つの『随筆北京』——太平洋戦争期の奥野信太郎をめぐる」

司会者：関根謙（慶應義塾大学 名誉教授）

②16:30 - 17:20 櫻庭ゆみ子（慶應義塾大学商学部 教授）

演題：「楊絳の語りとユーモア——距離感と倫理」

司会者：関根謙（慶應義塾大学 名誉教授）

総会

17:20 - 17:50

懇親会

18:00～

懇親会会場：日吉キャンパス来往舎 1階（ファカルティラウンジ）

参加費：6500円（学生3000円）

共催：慶應義塾大学藝文学会

お問い合わせ先：慶應義塾中国文学会 事務局(gakkai@keiochina.jp)